学生卒業設計制作NCF空間ディスプレイアワード受賞作品

	2025年
	最優秀賞
区　分	Ⅱ．生活ディスプレイデザイン
フリガナ	フクタ　ハワ
制作者名	福田　羽和
フリガナ	ダイドウダイガク　コウガクブ　ケンチクガッカ
卒業時の大学 学部・学科	大同大学工学部建築学科
フリガナ	フナハシ　ニナ　／　職名
	船橋　仁奈　／　教授
	ワレハカクチョウスル、ユエニワレワレハアル
作品名	我は拡張する、故に我々は在る

概　要

01.はじめに

現在では個人が社会と直接接続できるようになったが、学校や職場、家族などの帰属集団自体には大きな変化がみられず、その結果社会とのつながり方はあまり変わっていない。学校へ行く、職場へ行くといった生活行為そのものが社会とのつながりなのではなく、個人が社会とつながるためのプロセスこそ、個人と社会のつながりの本質であるといえるのではないか。

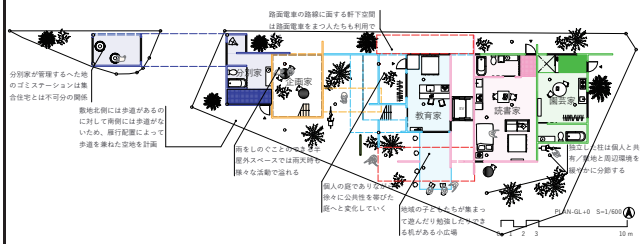
社会へのつながり方に溢れる住まい

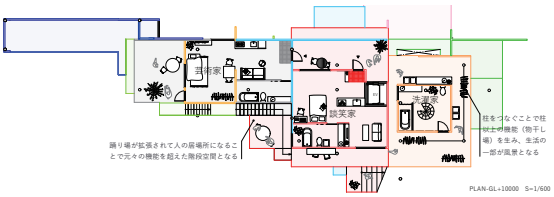
02.自分らしいつながり方

本設計では、集合住宅いおける「個人と社会のあいだ」すなわち「集まって住む」ことによりうまれる「共有部」に着目し、新たな個人と社会の在り方を示す。住民たちは、気が付かないうちに少しずつ小さな社会に貢献し、社会とのつながり方を知るのである。そして様々な共有部を通じ、今よりも多様で自分らしい社会とのつながり方を選択することができるようになる。

03.公共減歩の引用

本建築を設計するにあたって、「共有減歩」の考えを引用する。集合住宅の専有部を拡張し、少しずつ個人の領域を出し合うことで共有部を形成していく。共有減歩とは、事業に必要な土地を、区画内の所有者が公平に出し合うことで、道路や公園などの公共用地を確保・充実させる仕組みである。共有部をつくるための「専有部の提供」という行為は、集合住宅という社会への貢献でもある。この時点で既に、新たな個人と社会の関係値が生まれている。





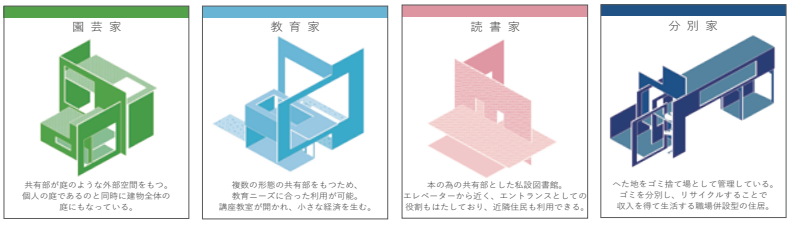
制作者名	福田　羽和
作品名	我は拡張する、故に我々は在る

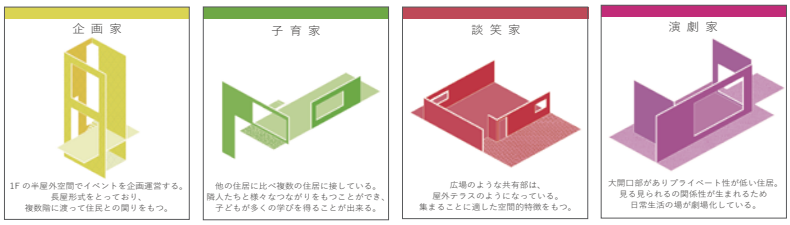
【コンセプト解説】

04.〇〇家としての住まい

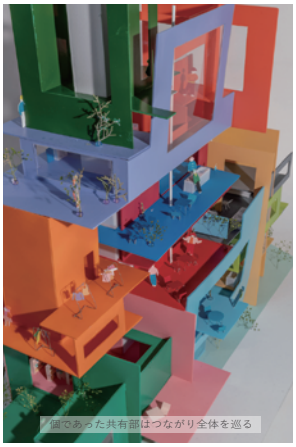
この集合住宅には〇〇家が暮らしている。〇〇家という言葉は、建築士と建築家が違うよう、〇〇士は資格の有無を指すのに対し、〇〇家は自分自身の生き方を指す。住民はある〇〇家として自分自身に合った空間の住居を選び、社会とつながる場として利用したり、異なる空間的特徴を読み解きながら、社会とつながる方法を模索し〇〇家として社会と関わることができる。

14人の生き方が反映された共有部は、集合住宅全体に反映するもの、地域の人を巻き込むもの、収入につながるもの、自己表現をするものなど様々である。



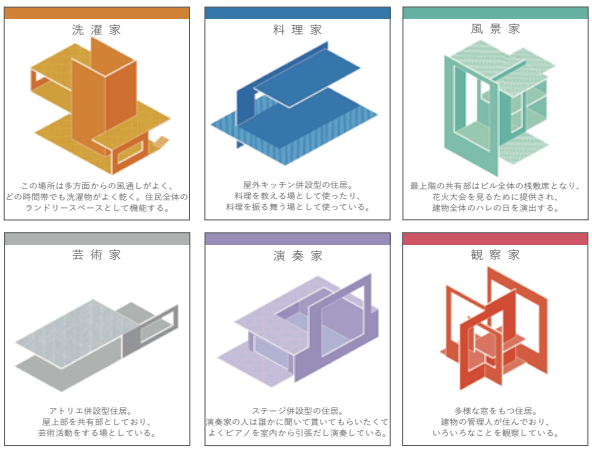


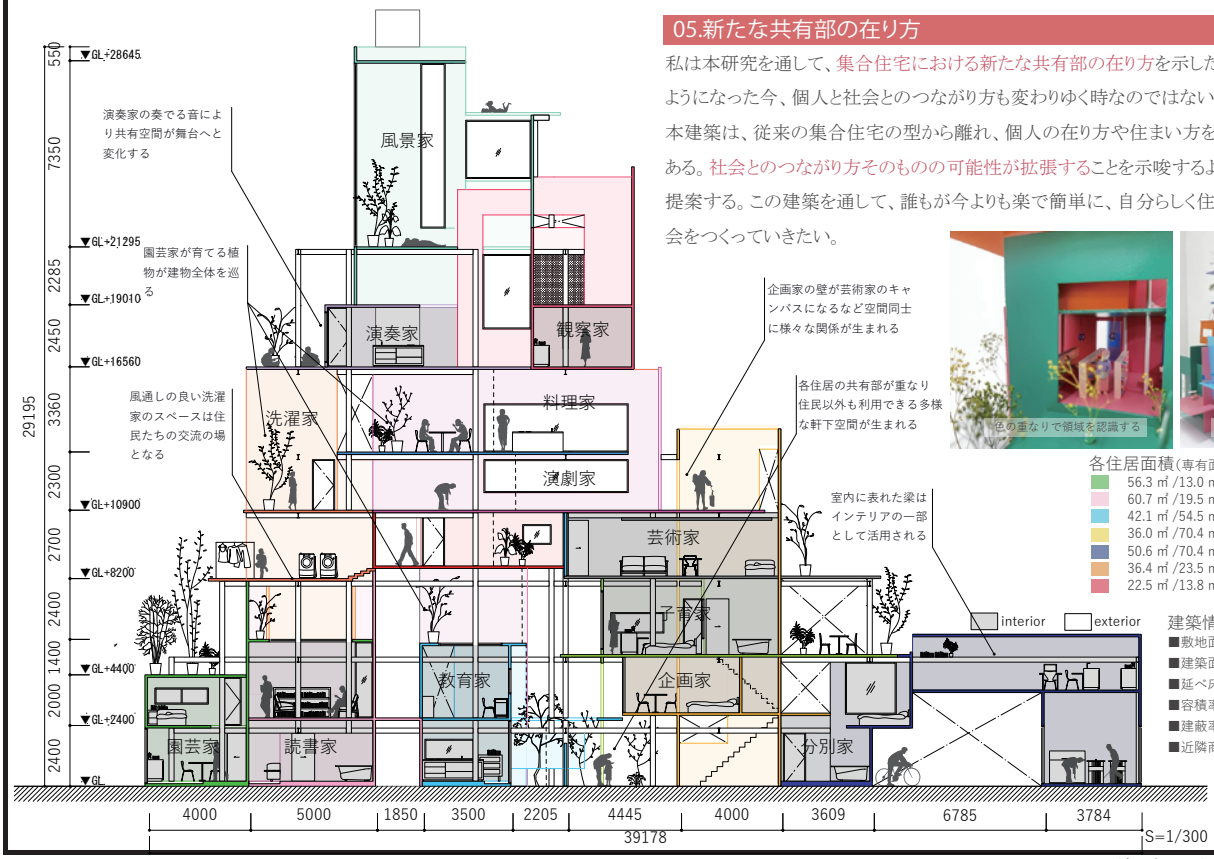
共有部にはそれぞれの〇〇家らしいものが溢れ出す


個であった共有部はつながり全体を巡る

北側ファサード

南側ファサード





05.新たな共有部の在り方

私は本研究を通して、集合住宅における新たな共有部の在り方を示した。個人がより尊重されるようになった今、個人と社会とのつながり方も変わりゆく時なのではないかと思う。そしてなにより本建築は、従来の集合住宅の型から離れ、個人の在り方や住まい方を問い直す問題提起でもある。社会とのつながり方そのものの可能性が拡張することを示唆するような、共有部の在り方を提案する。この建築を通して、誰もが今よりも楽で簡単に、自分らしく住まうことができるような社会をつくっていきたい。

色の重なりで領域を認識する

西側は垂直方向の絡みが強い

各住居面積(専有面積/共有面積)

56.3 ㎡ /13.0 ㎡	56.3 ㎡ /13.0 ㎡
60.7 ㎡ /19.5 ㎡	60.7 ㎡ /19.5 ㎡
42.1 ㎡ /54.5 ㎡	42.1 ㎡ /54.5 ㎡
36.0 ㎡ /70.4 ㎡	36.0 ㎡ /70.4 ㎡
50.6 ㎡ /70.4 ㎡	50.6 ㎡ /70.4 ㎡
36.4 ㎡ /23.5 ㎡	36.4 ㎡ /23.5 ㎡
22.5 ㎡ /13.8 ㎡	22.5 ㎡ /13.8 ㎡

建築情報
- 敷地面積 /380.684 ㎡
- 建築面積 114.803 ㎡＜304.547 ㎡
- 延べ床面積 650.2 ㎡＜761.368 ㎡
- 容積率 200%
- 建蔽率 80%
- 近隣商業地域